

## 環境審議会環境企画部会（平成 25 年 8 月 2 日）における主な意見

### 滋賀県における今後の環境学習のあり方について（素案）

理念をどう具体的にしていくかという仕組みづくりといった部分についてもう少し書き込めないか

子どもに環境を守ると言ってもなかなかわかってもらえないが、例えば食と関連させると興味を持ってもらいやすい。滋賀県では「おいしが、うれしが」キャンペーンをやっており、食とのつながりをもう少し書き込めないか。

発達段階に応じた環境学習が大変重要。実際、環境学習して効果があるのは、子ども。大人については、特に年配の方は環境保全について興味を持ってもらえる。「世代を超えたつながり」と言ったときに、発達段階に応じた環境教育のあり方をもう少し検討していただくということ。特に高齢者の方と次の社会を担っていく若者とのつながりが大切で、その一つの試みとして、世代間の交流。

滋賀県なので琵琶湖というのは前面に出てきているが、つながりという意味では、上流（流域）の部分がもう少し見えない。

「地球規模の視点から世界や世界の人々とのつながり」と書いてあるが、実感としては遠いもの。地域で環境学習をして、地域のいろんなところをつなげて、それを地球規模で理解してもらうためには、おそらく「コーディネーター」ではなく、「ファシリテーター」を育てていくのが一番重要。

既にある環境学習拠点というものをどのような形で質を高めていくのか。そして、それらを利用していくということもきちんと文書の中に組み込まれたほうが、より質の高いものができる。

何をすれば環境学習なのかという議論を反映し、総合的な複雑性にどのように向き合うのかということ、素案の中でも検討していることを触れたほうがよい。

「滋賀の環境学習で大切なもの」の「『つながり』を意識し深める」という部分で、文章の中では「世代を超えた関わり」という文言が出ているが、キーワードとして、「世代間のつながり」が項目としては挙がってきていない。「世代のつながり」というのをここで挙げてこないものか、再度議論を。

「持続可能な」というのはどのぐらいまで先のことを考えて「持続可能」と言っているか。それによっても取り組みに違いが出てくるのではないか。「世代間」ということで、2代あるいは3代ぐらいまでを考えればよいのかもしれないが、これからの将来の世代が、私たちがこの環境を享受したのと同じような環境を保つためには、おそらくもっと先まで考えて活動していかなければならない。

ESD（Education for Sustainable Development）の略として、「持続可能な開発のための教育」とあるが、これは、どこでもこのように言われているのか。「持続可能な社会づくりを目指した環境教育」は、非常にわかりやすい見方をしていると思う。

8 頁の「人と人とのつながり」の中で、「核家族化、地縁・血縁の希薄化の中で」とあるが、希薄化している状況の中で、世代間を超えて地域から学びあうために、古老、親子間や三世代が一緒に参加できるプログラムは、果たして可能なのか。